

地域連携事業への文教大学学生の取り組み —スポーツクラブへの食事アドバイス体験を通じて—

Bunkyo University Students' Approach to Community Cooperation Projects
-Through the Experience of Giving Dietary Advice to Sports Clubs.

大橋 洸太郎*, 渡邊 美樹**

Kotaro Ohashi , Miki Watanabe

Abstract

The Shonan Research Institute of Bunkyo University has been working with the Chigasaki Black Caps on community collaboration projects. One of the initiatives is the "Dietary advice project by Bunkyo University students to Black Caps' parents", in which, under the guidance of specialist teachers, students aiming to become dietitians provide dietary advice based on parents' requests. The project was conducted under the guidance of specialist teachers. Semi-structured interviews with the four participating students were conducted and analyzed, which revealed that the students learnt a lot through the project by being exposed to the meals prepared by the parents, who are the daily practitioners, and that they also gained confidence as advisers through the advice. The project also provided an opportunity for students to gain confidence as advisers through advice. It also became clear that there are several areas for improvement to better continue the project.

キーワード：

茅ヶ崎ブラックキャップス、地域スポーツクラブ、地域連携事業、産学連携事業、半構造化面接

1. はじめに

茅ヶ崎ブラックキャップスは、茅ヶ崎市を中心として活動する中学硬式野球チームである。「存在するなら進化しろ」をスローガンに掲げるこのチームは、神奈川県に存在する4つのリーグの垣根を越え、神奈川県 No.1 を決めるベイスターズカップへの出場を創設2年目にして果たしており、その成長が目覚ましい^[1]。また、このクラブチームの別の側面に、学校教育における部活動が抱える問題の解決に向けた取り組みを意識している点が挙げられ、その活動は

経済産業省が行う2021年度の「未来の教室」実証事業（「地域×スポーツクラブ産業研究会」第1次提言の実現に関するテーマ）にも認定されている^[2]。経済産業省（2021）によれば、この第1次提言には、2つの問題意識が含まれており、それぞれ「サービス業としての地域スポーツクラブ」を核とした産業クラスターの可能性”、“ジュニア世代のスポーツ基盤である「学校部活動」の持続可能性”となっている。前者は、地域経済に大きく影響する地域スポーツクラブの存在が欧州に多数あることから、地

* 文教大学情報学部

** 文教大学健康栄養学部

方創生に資する効果を期待して、日本においても地域スポーツクラブがこの枠を担えないかどうかを検討するもの、後者は、我が国の学校部活動の持つ、家庭の経済状況に左右されず参加可能である光の側面を認めた上で、教員に事実上無償ボランティアという犠牲を強いている影の側面について、早期解消を目指したいというものである。教員が抱える労働問題については、多くの研究によって指摘されているところであり^{14, 5, 6)}、時間外勤務の大部分を占める学校部活動に焦点を絞っても、これまで多くの研究において改善が必要なことが指摘されてきた^{17, 8)}。学校部活動の地域移行が進むことで、現在問題となっている教員の過剰労働問題にも、少子化に伴う学校単位でのチームメンバーの不足にも対処できる糸口となる可能性が少なくない。

また、日本スポーツ協会（2021）によれば、現在の中学校において、「担当教科が保健体育ではなく、かつ現在担当している運動部活動の競技経験がない」教員が26.9%おり、これに該当する教員の中で、指導において自身が問題・課題であると感じている項目として最も多かった回答が「自分自身の実技指導力の不足」（35.9%）であったという⁹⁾。各種の専門家を擁する地域スポーツクラブの力を借りることは、このような問題の対処にも繋がるのが考えられ、同調査では、実際に部活動指導員・外部指導者への依頼経験のある中学校は全体の79.2%であり、また休日の運動部活動が地域に移行された場合の意向として最も多かった意見が、地域人材に任せたい（45.6%）であったことも明らかにされている。すなわち、専門知識を持った地域人材を活用したいという声が少なからず存在するという事実だろう。このような観点を踏まえると、地域スポーツクラブとしてのブラックキャップスの存在や活動は注目に値する。

このように、1チームとして、そして社会問題の解決に向けた実証事業の1担い手として活動するブラックキャップスと文教大学は現在、

休日のグラウンド利用やクラブメンバーを支える保護者への食事アドバイスといった協同事業に取り組んでいる。本稿では、このうち“文教大学生によるブラックキャップスの保護者への食事アドバイス事業”を取り上げ、学生の体験に関する部分の報告を行うことを目的とする。

2. 事業内容

文教大学湘南キャンパスには現在、健康栄養学部と情報学部の2学部が存在している。このうち健康栄養学部の学生は将来、管理栄養士を目指す者が多い。このため、あくまでアドバイスの範囲ではあるものの、保護者から送られてきた食事内容の写真について、専門の教員の指導・管理の下、参加者の要望に応じた学生によるコメントを行うことが事業内容であった。また情報学部では、この取組みを追い、成果をデータとして取得し、まとめることを行った。手順は次のようなものとなっていた。本事業の時期は2022年8月であった。

1. ブラックキャップスの保護者に本事業の説明を行い、参加いただける方を募る。
2. 参加者から事前に、求めるアドバイス内容に関する個別の要望を伺う。
3. 参加者から作成した弁当や食事の写真を送って頂く。
4. 3. の写真を分析し、2. の要望を考慮する形で、学生がアドバイス案を作成する。
5. 4. の内容を専門の教員が確認し、返送する。

事業後に、実際にアドバイスを行った学生4名（いずれもインタビュー当時学部3年生）に対して参加内容に関する半構造化面接を行った。この結果を内容分析したうち、学生の体験部分に関する次の3項目について取りまとめたものを報告する。

1. アドバイスをする際に気をつけたこと
2. アドバイス事業の良かった点
3. アドバイス事業の改善点

3. 結果

3.1. アドバイスをする際に気をつけたこと

表1は「食事に関するアドバイスをする際に気をつけたこと」について得られた意見をまとめたものである。今回は6つの意見が得られた。表2に、表1の内容から読み取れる要点をまとめた。6つの意見からは、大きく2つの要点があり、それぞれ①学生がアドバイスをするにあたって無理のない助言となるよう心掛けていた

こと、②伝え方の順序やその内容の整理をすることに気をかけていたと判断した。「無理のない助言」については家庭の事情の考慮（番号A.2）、食事量を減らさずにメニュー内容を変えることで食事内容の脂質を減らそうという試み（番号A.3）、強いアドバイスにならないようにする（番号A.4）、現状の工夫を崩さない（番号A.6）という部分を根拠に、「伝え方の順序や内容の整理」については、いきなり食事の評価から入らない（番号A.1）、一番優先すべきことは楽しく食事をする（番号A.4）、重要なことを伝える際には根拠をつける（番号A.5）、という部分を根拠にしている。

表1 アドバイスをする際に気をつけたこと

番号	内容
A.1	いきなり食事の評価から入るのではなく、お弁当の良い所から言及するようにした。
A.2	家庭の事情もあるので、無理は言わず、実現可能な範囲で提案するようにした。
A.3	脂質を減らす際に、通常の食事を減らすというよりは、増えすぎないメニュー内容となるように気を付けた。
A.4	一番優先すべきことは、楽しく食事をする、つくるといふことだと思うので、強いアドバイスにならないように考えた。
A.5	重要なことを伝える際には、根拠を持って説明することを大切にしていた。
A.6	現状の取組みが子供に対する適した答えの1つになっていると感じたため、現状の工夫を崩さないように気を付けた。

表2 質問1の集計

内容	度数	該当する意見の番号
無理のない助言	4	2,3,4,6
伝え方の順序や内容の整理	3	1,4,5

3.2. アドバイス事業に参加してよかった点

表3は「食事に関するアドバイスをする際に気をつけたこと」について得られた意見をまとめたものである。今回は次の9つの意見が得られた。

表3の内容から読み取れる要点を表4にまとめた。最も多かった意見は「自身の勉強・経験になる」であったものの、具体的な学びや経験の内容については差異があり、それぞれ保護者の方の作る弁当への工夫（B.1）や、管理栄養

表3 アドバイス事業に参加してよかった点

番号	内容
B.1	保護者の方の工夫が、大いに自身の勉強になった。
B.2	子供の気持ちも、保護者の気持ちも分かった。
B.3	管理栄養士はアドバイスをする場面も多いと思うため、すごく良い勉強になった。
B.4	写真を見ただけではわからないことについては、調べることで勉強にもなった。
B.5	個々人の事情に合ったケースに遭遇できた。
B.6	学んできたことを活かすことができた。
B.7	指導系の面で企画をいろいろ考えてみたくなった
B.8	アドバイスの作成の上で気を付けることが分かり、学びになった。
B.9	アドバイスをみて下さる相手の気持ちで資料作成を試行錯誤していくのが楽しかった。

士としてのアドバイスを行う上での経験(B.3)、資料を作成する上での追加の学習や工夫 (B.4, B.8)となっていた。特にB.8の意見については、回答者からの回答が次のようになっていた。

“資料を作成していく上で内容も盛り込みすぎないということや、理屈立った説明すること、それをわかりやすい言葉で伝えることを考えながら作っていて、それがすごく学びになったなという風に感じました。”

すなわち、表2における「伝え方の順序や内容の整理」とも関連するような部分の学びに該当する意見であり、アドバイスにおいて簡潔さや分かりやすさを追求したことが学生にとって良い経験になったものだと考えられる。

続いて「アドバイス相手の気持ちの把握」に該当する意見が2件 (B.2, B.9)、「個別のケースへの遭遇」「学びを活かせる場となる」「更なるアプローチの希望」が1件ずつ (B.5, B.6, B.7) みられた。B.2は、学生にも中学生時代があり、その頃の運動部としての食事に対する要望も分かりながら、管理栄養士を目指し、保護者の要望を元にアドバイスをするという立場から親(大人)の気持ちも分かる時期に自身が達したことから、双方の気持ちを理解した上でアドバイス案を作成したことが良かったという意見であった。

また、B.5については、実際に保護者からの要望を聞き、そこから栄養面を考えたアドバイスをするという個別ケースへのリアルな対応の経験ができたことを参加のメリットとして挙げ

表4 質問2の集計

内容	度数	該当する意見の番号
自身の勉強になる	4	1,3,4,8
アドバイス相手の気持ちの把握	2	2,9
個別のケースへの遭遇	1	5
学びを活かす場となる	1	6
更なるアプローチの希望	1	7

たものである。最後に、B.7の「更なるアプローチの希望」については、実際には次のようなインタビュー内容をまとめたものであり、

“今はゼミ内でグループ別に活動をしていて、私のグループは教職を取っている人が多く、指導系の面で企画をいろいろ考えることも多いので、指導系の企画も実際にブラックキャップスの皆様に何かできたらいいなって思いました。”

この企画の経験を活かし、追加で関わっていきたいという意見であった。このように、学生の中には、体験を通じてより多くの経験の場を求めるようになる者もみられた。

3.3. アドバイス事業の改善点

表5は「アドバイス事業の改善点」について得られた意見をまとめたものである。今回は次の8つの意見が得られた。

表6は表5の内容を要点として集計した結果である。多かった意見は「直接相対するコミュニケーション」がほしいというものであり、より多く相手と関わる機会がほしかったという意見が目立っていた。相対する相手としては保護者だけでなく（C.3, C.5）、子供も含まれており（C.2）、より適切なアドバイスを行うために、より多くの接点や情報を得たいという学生達の気持ちが表れていた。これは、「より多くの機会を望む」（C.1, C.4）という意見にも表れてい

表5 アドバイス事業の改善点

番号	内容
C.1	夏休み、冬休み、春休みにもコミュニケーションを取りたい。
C.2	コロナ禍で直接子供たちの様子がみられなかった。実際に子供を見たら、食の細さなども見て取ることができたのではないか。
C.3	お弁当の写真を見て判断するという形だけだったので、直接保護者の方たちとミーティングに参加できたらもっとよかった。
C.4	もう少し回数をこなすと自信がつくと思う。
C.5	保護者の方の顔合わせもしたかった。
C.6	勉強中の身であるため、先生に監督してもらっているとはいえ、正しいアドバイスができているか不安もあった。
C.7	向こうの方の知識量とか、どういう知識が欲しいとか要望とかが、最初把握できなくて、そこに苦労した。
C.8	フィードバックがあったら嬉しい

表6 質問3の集計

内容	度数	該当する意見の番号
直接相対するコミュニケーション	3	2,3,5
より多くの機会を望む	2	1,4
アドバイスへの不安	1	6
相手の要望の把握をより深く行いたい	1	7
フィードバックがほしい	1	8

る。ただし、C.4などは学生自身に自信をつけるためには、より多くの回数をこなしたいという意見であった。また、「相手の要望の把握をより深く行いたい (C.7) や「フィードバックがほしい」(C.8) についても、改善点としてより多くのやり取りの機会を設けることで、これらの意見に対する改善が見込めるのではないかと考えた。

4. おわりに

本稿では、湘南総合研究所の地域連携事業の一環として行われた“文教大学生によるブラックキャプスの保護者への食事アドバイス事業”の概要と、実際にアドバイスに関わった学生視点からの体験の概要について報告した。具体的には、4名の参加学生に対する半構造化面接を行い、その結果を内容分析することで、学生達がどのような学びを得たのか、そしてどのような修正を望んでいるかをまとめることで、事業参加へのメリットや、次年度の事業への改善点を洗い出すことができた。

インタビュー結果からは、学生がアドバイスをする際に、相手に対して無理を言わないように配慮していた点や、保護者が既に行っていた弁当作成の工夫を目の当たりにし、そこから多くの点を学んでいたことが明らかとなった。子供という大切な対象に対し、より良い栄養状態を目指し、成長を願って日々実践を続ける保護者の実際の食事内容に触れることができるという体験は、管理栄養士を目指す学生達にとって得るものが多かったことが、表1や表3の内容から伺える。また、事業を通じて、学生達がより良いアドバイスを積極的に行いたいという意思がみられ、それらが改善点に見られる、より多くの接触機会や、より多くのアドバイスの機会を求めるといった意見に繋がったのではないかと考える。地域連携の枠組みの中で改善点を考慮しながら、次回の事業運営に繋げたい。

引用文献

- [1] 第11回 DeNA ベイスターズカップ～2023年神奈川県中学硬式野球選手権大会～概要
<https://www.baystars.co.jp/region/denabaystarscup/>
- [2] 経済産業省 (2021) 地域×スポーツクラブ産業研究会の第1次提言
https://www.meti.go.jp/shingikai/mono_info_service/chiiki_sports_club/20210625_report.html
- [3] スポーツ庁 (2018) 平成30年運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/013_index/toushin/_icsFiles/afieldfile/2018/03/19/1402624_1.pdf
- [4] 大内裕和 (2021) 教員の過剰労働の現状と今後の課題, 日本労働研究雑誌, 63 (5), pp.4-13.
- [5] 油布佐和子 (2018) 教員の勤務実態—現状と課題, 労働法律旬報, 1925.
- [6] 内田良・上地香社・加藤一晃・野村駿・太田知彩 (2018), 調査報告 学校の部活動と働き方改革—教師の意識と実態から考える, 岩波書店.
- [7] 大橋基博・中村茂喜 (2016) 教員の長時間労働に拍車をかける部活動顧問制度, 季刊教育法, 189, pp.36-46.
- [8] 中澤篤史 (2017) 部活動顧問教師の労働問題—勤務時間・手当支給・災害補償の検討, 日本労働研究雑誌 59 (11), pp.85-94.
- [9] 日本スポーツ協会 (2021) 学校運動部活指導者の実態に関する調査報告書
https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/katsudousuishin/doc/R3_houkokusho.pdf